

中世都市ル・マンのコミューン運動

守 山 記 生*

LE MOUVEMENT COMMUNALE DU MANS

Une Des Cités Médiévales

par

Norio MORIYAMA

この小論は、中世都市ル・マンのコミューン運動について、経過、原因、特徴の順に検討しようとするものである。

(I)

まず、経過から始めよう¹⁾。初めに、ル・マンの人々の反乱について、メーヌ伯エルベール2世 **Herbert II**は、母ベルトの助言にもとづいて、1058年から1060年の間にノルマンディ公ギヨーム庶子公 **Guillaume le Bâtard** と協定を結んでいた。この中で、エルベールはギヨームの家臣であると認められ、ギヨームの娘と結婚することを約束し、又ギヨームの息ロベール・クルトウーズ **Robert Courteuse** に自分の妹マルグリットを再婚させることが決められた。更に次のことが決められた。即ち、もしエルベールが子供なしに死んだ場合には、伯領の継承権をノルマンディ公に保証する。この時は実際にはやばやとやって来た。エルベール2世は、1062年3月9日子供を持たずに死去した。メーヌ地方はノルマンディ公の手に帰したが、ル・マンの人々はこれをきらって、マヤンヌの領主ジョフロア **Geoffroi** とメーヌ副伯イペールに支援されて反乱をおこした。ジョフロアはこの反乱の中心人物であるヴェクサン **Vexin** 伯ゴーティエ3世に味方した。公は、憤慨して、諸領主に従うル・マン人をこらしめるために戦闘を開始した。ギヨーム庶子公は平然として、ファレーズにゴーティエとその妻を連行し、投獄、毒殺した。一方、ジョフロア・ド・マヤンヌの城は焼き払われた。

ギヨームはそれからエルベール2世と進められた協定を実施する。即ち、彼の息ロベール・クルトウーズはメーヌ伯に指名し、最高の巧妙さで、アンジュー伯ジョフロア・ル・バルブ **Geoffroi le Barbu** に臣従させた。1065年5月10日司教ブーグランが死ぬと、ギヨームは彼の後継者でコミューン運動に関わりをもつアルノー **Arnaud** を選んだ。ギヨームはカテドラルのそばに四角形の天主閣を打ち込み、旧囲壁の先に大小のモン・バルベ **Mont Barbet** の小丘を築き、そこに駐屯部隊をおいて、防禦体制を更新した²⁾。

この1062年又は1063年の反乱では³⁾、ヴェクサン伯やジョフロア・ド・マヤンヌの反ギヨーム闘争にル・マンの人々が加担していたのが実情ではなからうかと思う。

つぎに、1069年の反乱について述べよう。ル・マンの人々は半ば甘んじたにすぎなかった。ギヨーム庶子公とロベール・クルトウーズの不在を利用して、領主たちと民衆は1069年

* 史学研究室（昭和58年9月30日受理）

に反乱をおこした。彼らはその頭目にイタリア人でイタリアの辺境伯でありエステ Este の領主アゾン Azzon をおいた。彼は旧伯エルベール・エベューユ・シヤンの娘と結婚していた。アゾンは、数と力に頼って当地域を服属させたが⁴⁾、彼はル・マン地方の人々に恩恵を施すために持ってきた金のすべてを費やした。そして彼の財宝が使い果されたとき、彼は有力な領主ジョフロア・ド・マヤヌの手中に、彼の妻ゲルザンと息ユグとをおいて、彼の本拠地イタリアにもどった⁵⁾。

この1069年の反乱では、民衆もかなりの主体となったと思われる。

ついに、1070年ル・マンの市民は、いまやメーヌに事実上の権力を行使したジョフロア・ド・マヤヌに対してコミューン運動をおこした⁶⁾。

『ル・マン司教伝』によれば以下のような事実が存在する。

『マヤヌのジョフロアは、ゲルザンの後見人となり「夫に近い存在」になって、市民たちに対抗する機会を求め、新しい課税によって彼らを圧迫することを企てたので、市民たちは彼の邪まな企てを喰い止めておく方法を見つけ出すために、又彼或いは他の誰によっても彼らが圧迫されることはもはや許容しないために集会を持った。それ故に、彼らがコミューンと呼んだ徒党を結成して、彼らは誓約によって全員を同一の行動に結びつけ、いやいやながらも当地の貴族たちとジョフロア自身をも誓約させた。この誓約団体をも結成させた大胆不敵さによって、彼らは数々の悪行を犯し、とりわけ正当な判断もなしにとるにならない理由で非難して彼らはある人々の目をえぐり、更に語るもいとわしいことだが、最もささいな欠点のゆえに彼らを絞首刑にした。彼らはさしたる理由もなく四旬節と御受難の主日でさえ郊外の城に火をつけた。当地の有力者の一人であるユグ・ド・シイレはいくらかの不正義によって誓約した人々を怒らせていたので、即刻、彼らは聖なる取り決めに敵対したユグと呼ばれるこの男に対する反徒を集めるために当地域全体に使者を派遣した。ひとたび形成された軍隊は、司教や十字架と旗をもつ種々の教会の主任司祭によって先行されて、彼らはシイレの城にむかって猛烈な突撃に身を投じた。

彼らが城からほど遠くないところで捕えられた一方で、計略によって彼らに加担していたが、少し前にふれたところのジョフロアは近くに彼のキャンプを張った。使者によって敵と秘密裡に接触を持ったのちに、彼はあらゆる方法で誓約した人々の攻撃を阻止するように努めた。朝になって城を出発した敵が戦いを挑発しはじめたとき、我々は続いておこった喧々ごうごうたる叫びに驚いた。彼らが敵と交戦しはじめる一方で、決起した人々のうちの陰謀から発した不穏なざわめきがキャンプ内にひろがった。そのざわめきが言い切るには、都市は敵とぐるになった墮落した人々の行動によって敵に渡されてしまったということであった。農民の大多数は一方では敵によって他方ではこのにせの良からぬざわめきによって恐怖におちいり、武器を放り出して逃げ出しはじめた。この逃亡中にいかに多くの者が捕えられ、いかに多くの者が傷を負い、彼らの非行でいかに多くの者が急流で又くぼんだ路上で鎮圧され皆殺しにされたかを語ることは我々の著述に属さない。兵士のみでなく小さい虚弱な女性でも簡単にまるで野原で鹿のように捕えた行きさつはこまかく話さないことにおこう。司教については彼も同様に捕えられ見張り付きで幽閉されたことを挙げておこう。このために悲歎と恐怖のうちにある我々の都市は舵のない船舶のように漂流している。しかしながら、ユグ・ド・シイレは寛大な男であった。司教に害が及ぶことを良しとせず、直ちに彼は丁重に司教を彼の許に移させた⁷⁾。』

この反乱⁸⁾の2年後、征服事業が一段落つくと、ギョーム征服王は強力な軍隊と共にメーヌに到着した。彼は都市の城門で自らを名乗った。貴族の頭目たちは、彼の威嚇にびっ

くりして、彼にえっ見し、降伏した。民衆についてはもはや問題がなかった。このようにしてコミューンは破棄された。しかし、ギヨームは反乱について罰を受けないことを約束し、この都市の古い習慣にして法 *antiquas ejusdem civitates consuetudines atque justitia* を維持することを約束した⁹⁾。

(II)

つぎに、経過からみた原因を簡単に論じておこう。まず、ル・マンのコミューン運動の背景(遠因)には、ギヨームのメヌ伯領支配をめぐる政争があり、この闘争がル・マン地方支配にもたらした混乱・危機がある。即ち、メヌ伯エルベール2世は協定によってノルマンディ公の配下になったが、ギヨームと息ロベール・クルトウズは1062年か1063年の乱後、後者はメヌ伯となった。ついで、アゾンは1069年の反乱で、多額の戦費を使いル・マン地方を支配したが、財政難におち入り、新税徴収の必要が生じた。最後に、今やル・マン地方の実質上の支配者になったジョフロア・ド・マヤヌはアゾンの妻の後見人になり、「夫に近い存在」になった。ここでは、ギヨームとその息は伯権保有者として何らかの支配権を留保しただろうし、アゾンも又然りであった。それに実質上の支配者になったジョフロア・ド・マヤヌがおり、ル・マン地方支配をめぐる三者がてい立することになり、支配の混乱・危機は極まった。

そして、直接的原因として、ジョフロア・ド・マヤヌの支配の安定・強化をめざすための市民に対する圧迫、特に恣意的な課税 *exactio* であった。この課税を排除することがコミューン運動の第一目標であった。

更に、ひとたび成立したコミューンに対するユーク・ド・シイレのコミューン敵対行為も原因の一つとしてあげられるであろう。『ル・マン司教伝』によれば、「いくらかの不正義によって誓約した人々を怒らせていた……」とあるので、漠然とコミューンに反対したのではなく、具体的な敵対行為があり、コミューン市民は討伐軍を結成することになったのである。

(III)

最後に、特徴に移ろう。まず述べねばならないのは、ル・マンのコミューンはヨーロッパで *communio, conspiratio, conjuratio*、即ちコミューンの記述が史料上で初めて出てくる例である。958年のカンブレー *Cambrai* の反乱は、主に庶務役人ミニステリアーレスの反乱で、ここで結成された「徒党」*conspiratio* はコミューンとはいいがたい。更にライン都市では1073年のウォルムス *Worms* が最古であり、北東フランス都市では1077年のカンブレーが最古である。ラトゥーシュによれば、同様の運動は多分他の場所で生じたであろうし、それらを発見することはばかりでなく、それらの失敗の原因を探究することも興味深い¹⁰⁾としているが、コミューンという記述がル・マンではじめてなされているということである¹¹⁾。我々はル・マンのコミューンは史料上で初見する最古のコミューン運動であるといっておこう。

つぎに、経過からみたル・マンのコミューン運動の主体について考えたい。『ル・マン司教伝』によれば¹²⁾、初期では特にあきらかに市民 *cives* である。市民自体の誓約 *sacrament* によるコミューン *communio, conspiratio, conjuratio* の結成。市民、ル・マン地方の貴族 *proceres* に誓約を要求。ジョフロア・ド・マヤヌと貴族の参加。市民によるシイレ城主ユーク討伐の決定、地域の農民が参加して一時的に連帯を結ぶ。司教アルノ

ーがいつコミューンに参加したかは不明だが、そして1069年反乱時にはイギリスで傍観していたが、この段階、即ち聖なる取り決め *sanctis instructionibus* の敵対者に報復する段階で、軍の指揮者となったことはあきらかである。他に主任司祭も参加した。

即ち、初期には主導権は市民にあり、討伐軍結成後主導権は司教にある。従って、フェルメースによれば、都市コミューンと教区コミューンの混血的性格をもつ¹⁾といわれる。筆者としては、あきらかに都市コミューンであるが、「神の平和」運動の余韻を部分的に感じさせ、教区コミューンの要素を混在させていると考えたい。

なお、このコミューン運動に参加した中心はシテの市民 *cives* であるが、サン・ヴァンサン修道院やその他の修道院のブールの住民も合体していたことである。それだけでなく、ル・マン市民自体の中にも、その両親がかってサン・ヴァンサン修道院や他の宗教施設のファミリー *familia* に属していて、したがってブールの住民に出自する民衆がふくまれていたのである⁴⁾。

つぎに、原因からみたコミューン運動の目標について考えてみよう。市民に対する圧迫、特に恣意的な課税を排除することが第一目標であった。そのために課税の限定、慣習 *coutume* の履行を求める。このことは、市民たちはコミューン運動後、ギョームにこの都市の古い慣習にして法 *antiquas ejusdem civitates consuetudines atque justitia* を保証されたことから傍証できると思う。この前提には恣意的な課税は一種の掠奪行為（平和違反）とみなす考えがあるといわれる。シレの城主ユージュに対する実力行為は農民と連帯してこのような平和違反者に報復するためである。

ただし、司教アルノーの参加にはこのような秩序の回復を求めるほかに彼及び保護者ギョームの敵対者を制圧する狙いもあると思われる。

最後に、反ギョーム闘争との関係について述べておこう。このコミューン運動の背景にはギョームのメヌ伯領支配をめぐる政争と、この政争がル・マン地方支配にもたらした混乱、危機があり、コミューン運動参加の市民もこのような政争がル・マン市にもたらす混乱、圧迫——具体的には特に苛税——と闘った。従って、圧制を排するという意味でなら反ギョーム闘争にもなり得たと思われる。

一方、コミューン維持の誓約に参加した貴族や司教は、この運動を支配者間の反ギョーム闘争とギョームに組みする闘争の一環として利することをめざしたように思われる。前者の代表は多分ジョフロア・ド・マヤヌであり、後者の代表は司教アルノーである。

注

- 1) ル・マンの中世初期史（コミューン前史）については、F. Dornic (éd.), *Histoire Du Mans et du pays manceau*, 1975. 瀬原義生, 「ヨーロッパ中世都市の起源(一)——西フランス, 南フランス, ブルゴーニュ地方——」立命館文学 321号, 1972年. 井上泰男, 『都市の語る世界の歴史』1978年をそれぞれ参照のこと。
- 2) A. Vermeesch, *Essai sur les origines et la signification de la commune dans le nord de la France (XI^e et XII^e siècles)*, 1966. PP. 81—82. F. Dornic, op. cit., P. 84.
- 3) *Chronique Anglo-Saxonne* によれば1062年であり, Orderic Vital と *Annales du Mont-Saint-Michel* によれば1063年である。
- 4) ラトゥーシュによれば, メヌにアゾンの権力をきづくことに成功しなかったともいわれる。
R. Latouche, *La commune du Mans (1070)*, dans *Etude Médiévales*. 1966, p. 122.
- 5) *ibid.*, P. 122. A. Vermeesch, op. cit., PP. 82—83. F. Dornic, op. cit., P. 84.
- 6) G. Duby (éd.), *Histoire de la France urbaine*, t. 2, 1980, P. 166.

7) Actus episc. Cenom., éd. Mabillon, Vetera Analecta, (1723), P. 308. «Hujus igitur Gaudfridus de Meduana tutor et quasi maritus effectus, cum adversum cives quasdam occasiones quaereret et novis quibusdam exactionibus eos moliretur opprimere; consilium inierunt, qualiter ejus pravis conatibus obstisterent, nec se ab eo vel quolibet alio injuste opprimi paterentur. Facta itaque conspiratione, quam communionem vocabant, sese omnes pariter sacramentis astringunt, et ipsum Gaufridum, et ceteros ejusdem regionis proceres, quavis invitos, sacramentis suae conspirationis obligari compellunt, cujus conjurationis audacia innumera scelera commiserunt, passim plurimos sine aliquo judicio condemnantes, quibusdam pro causis minimis oculos cruentes; alios vero (quod nefas est referre), pro culpa levissima suspendio stragulantes; castra quoque vicina diebus sanctae Quadragesimae, immo Dominicae Passionis tempore irrationabiliter succedentes. Dum itaque quidam ex primoribus ejusdem regionis Hugo scilicet de Silliac, quibusdam iniuriis adversum se conjuratorum animos irritasset, subito per totius regionis populos legatos miserunt, contra praefatum Hugonem qui sanctis instructionibus obsistebat, tumultuosae multitudinis agmina concitantes; congregatoque exercitu, Episcopo et singularum ecclesiarum Presbyteris praeerentibus, cum crucibus et vexillis ad castrum Silliacum furibundo impetu diriguntur. Cum autem haud procul a castro consedisent, Gaufridus, cujus supra mentionem fecimus, ipsorum comitatu fraudulenter adjunctus, non longe ab eis castra posuit, et clam cum hostibus per internuntios collocutus, ad dissipandos conjuratorum conatus modis omnibus laborabat. Facto ergo mane, adversarii de castro egressi, cum exercitum ad pugnam provocare coepissent, nostris repentino clamore excitis, et in occursum hostium irruere praeparantibus, expeditorum machinatione rumor in castris subito exortus est, falso asserentium, quorundam sceleratorum consensu adversariorum partibus esse traditam civitatem. Rusticorum itaque multitudo hinc timore hostium, illinc falso rumore perterrita, projectis armis in fugam conversa est: in qua fuga, quanti capti, quanti vulnerati, quanti a semetipsis in torrentibus et in semitarum angustiis oppressi atque extincti sunt, non est opusculi praesentis evolvere. Et, ut de ceteris taceam, tam nobilibus quam ignobilibus, quos non solum milites, sed et muliercula passim per agros velut damulas pro arbitrio capiebant, ipse quoque Episcopus, pro dolor, ab ipsis comprehensus, et custodiae mancipatus est. Qua de re civitas nostra in luctu et tremore posita, huc atque illuc velut navis absque gubernaculo ferebatur. Attamen praedictus Hugo, quia homo liberalis erat, nolens Episcopum iniuriis atrectare, sine dilatione eum ad propria cum honore dimisit.»

8) この反乱によって、ル・マンのコミューン運動が終わったとする Duby 編纂の前掲書には同意しがたい。G.Duby, op. cit., p.166.

9) R. Latouche, op. cit., PP.124—125. 瀬原, 前掲論文, 55頁.

10) R. Latouche, op. cit., P.126. ラトゥーシュによれば、ル・マンのコミューン運動の失敗の原因は、ギョーム征服王の圧力と、内因として富裕な都市貴族が存在しなかったからである。

11) A. Vermeesch, op. cit., P.87.

12) 『ル・マン司教伝』は事件の約60年後に作成された。従って、史料を批判的に読みとる必要がある。この間に、コミューン運動は都市的意識のうちに展開しており、年代記作者が市民階級の主導権を誇張しなかったかどうか問わねばならない。一方、筆者が教会的である以上むしろ司教の役割を強調する傾向を持ったであろうと反駁することが出来る。従って、基本的にあいまいさを取り除くことが出来ないが、一応、『ル・マン司教伝』の内容を事実として考えてみたい。cf. A. Vermeesch, op. cit., P. 87.

13) *ibid.*, P. 87.

14) R. Latouche, op. cit., P. 125. 井上, 前掲書, 165—166頁.

SOMMAIRE

Ce modeste essai examine successivement le cours des évènements, les causes et les caractéristiques du mouvement communale du Mans, cité médiévale.

Une partie des "Actes des évêques du Mans" viendra, entre autres, appuyer le récit détaillé du processus du dit mouvement, suivie de trois exemples qui, eux, expliqueront les causes médiates comme directes.

Quant aux caractéristiques, le mouvement communale mançais étant le plus ancien, il sera primordial d'examiner un par un ses auteurs et leurs buts, sans oublier la lutte acharnée menée contre Guillaume le Bâtard.